

## 【元気のタネ】

### 銀のパワー開花 江南の塗装会社「ペイントサービス」

2010年6月8日

抗菌効果が高いとされる銀の微粒子を、塗装の表面にくっつける。開発に10年を費やした独自技術が、花開こうとしている。壁や天井などに塗ってクリーンな室内をつくるだけでなく、いすや机、パソコンのキーボードと、ペンキが塗れる素材なら塗布できる優れものだ。

塗装会社「ペイントサービス」(愛知県江南市)。光触媒の二酸化チタンと銀を合わせた微粒子をアルコールに溶かして吹き付ける技術を開発し、昨秋から市場に本格投入した。微粒子は大同特殊鋼(名古屋市)が1997年に開発した「光ギンテック」だが、高い効果の塗装ができるようになるまでには試行錯誤があった。



抗菌塗装用のスプレーガンを手にするペイントサービスの村瀬栄次社長＝愛知県江南市で

内外装の塗装では、価格以外に差別化を図りにくい。「オンリーワン技術をと乗り出したが、3年前にあきらめかけた」と同社社長の村瀬栄次さん(60)。銀を塗料に混ぜるだけでは、表面に露出する銀が1%以下とわずかなため、抗菌効果が上がらない。塗装の表面に後から銀を施すと銀を均一に付けられず、はがれやすい。

突破口は、ビルの壁材の仕上げを頼まれた顧客からのクレームだった。塗料をスプレーガンで噴霧する際に巻き込んだ空気中のほこりが、表面に凹凸を作っていた。

「ほこりを銀に変えられれば」。塗ったペンキが乾く前に光ギンテックを吹き付け、塗装に銀を食い込ませる方法を発案。まんべんなく塗装するため、既存の静電気塗装装置を使い、表面積1ミリ角あたりに100万個以上の微粒子を付着させる技術を確立した。

「銀を使った抗菌製品はこれまで性能や効果を十分示せず、うさんくさくみられていた」(村瀬さん)ことから、塗料の倉庫を研究室と実験室に改装し、電子顕微鏡を導入。効果の「見える化」も売り物にしている。

これまでに地元の小学校、幼稚園のトイレのほか、在京百貨店の子供服売り場やトイレなどで施工した。年明け以降、鉄道会社や家電メーカーなどからも引き合いが急増している。

リーマン・ショック前に7億円だった売上高は、2010年4月期は5億6000万円まで減少。住宅、工場、商業施設向けとも受注減が続く厳しい状況だが「社運をかけた技術」(村瀬さん)に、表情は明るい。

(鈴木智重)